



さい帯血バンク NOW

第61号

2011年9月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：中林正雄（会長）

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社西館5階

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.j-cord.gr.jp/>

原発事故関連で さい帯血バンクからの声明

今年3月11日に発生した未曾有の規模の東日本大震災、それに津波の被害も加わって電源を失うことにより派生した福島第一原子力発電所の事故は、将来にわたる大きな放射能被害をもたらしました。こうした事態に鑑みて、日本さい帯血バンクネットワークでは会長声明文「福島第一原子力発電所作業員等にさい帯血移植が必要になった場合の日本さい帯血バンクネットワークの対応について」を発表し、もしもの状況が生じたときにも万全の体制で臨む姿勢を明らかにしました。そのような事態が発生しないことを祈りつつ、右に声明文を掲載します。

福島第一原子力発電所作業員等にさい帯血移植が必要になった場合の日本さい帯血バンクネットワークの対応について

2011年6月26日

日本さい帯血バンクネットワーク
会長 中林 正雄

この度の東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故によって被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、復興をめざして厳しい環境の中で作業に当たられている関係者の皆様に心からの敬意を表します。

原子力発電所の事故に関しては、予断を許さぬ状況下で、放射能被害を阻止すべく国民の安全保持を第一優先に対応する作業員の方々への被曝も報道されています。被曝された作業員の方にさい帯血移植が必要になった場合の

日本さい帯血バンクネットワーク（以下、当ネットワーク）の基本方針についてご報告申し上げます。

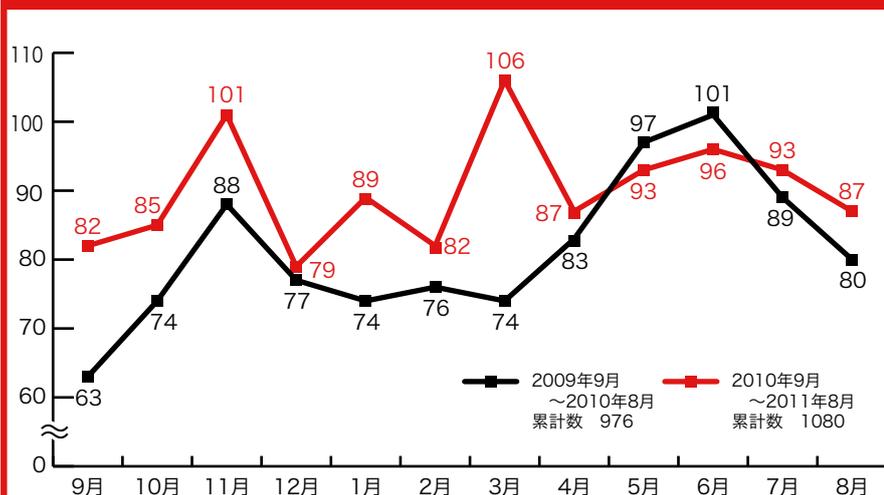
当ネットワークに加入している全国10ヶ所のさい帯血バンクには、移植に必要なさい帯血が多数凍結保存されています。このため、迅速な移植が可能であるという点でさい帯血移植は血液難病の治療に多大な貢献をしてきました。当ネットワークとしては1999年の東海村JCO被曝事故でのさい帯血移植の経験も生かし、さい帯血移植のメリットを最大限に活用して、被曝された作業員の方に必要な事態が生じた場合には迅速に対応させていただきます。

さい帯血移植にはメリットばかりでなく、移植片対宿主病（GVHD）や免疫回復の遅延などのデメリットもあります。造血幹細胞移植が必要な場合には、厚生労働省ならびに日本造血細胞移植学会を含めた関連諸機関と連携を密にし、適切な幹細胞移植への対応を行う所存です。

なお、これらの緊急対応が、さい帯血移植を行う難治性血液疾患の患者さんに不利益となる事態は生じませんので、ご安心ください。

非血縁間さい帯血移植状況(2011年9月1日現在の速報値)

移植数(累計) **7707** 公開数 **32805**



※複数さい帯血移植数を換算しています。



コーディネーター (CTC)職の確立と普及のために 学会で研修会参加者を募集中

「CTC」と聞いて、みなさんどんな仕事を想像されるでしょうか。日本造血細胞移植学会では、「平成23年度CTC (Clinical transplant coordinator) 研修」についての募集案内をホームページで行っています。聞きなれない「CTC」という職業について、ご紹介したいと思います。

CTCとは、造血細胞移植クリニカルコーディネーターのことを言います。コーディネーターというと、骨髄移植推進財団(骨髄バンク)のドナーコーディネーターをイメージされる方が多いと思いますが、その仕事内容は異なります。CTCは各移植施設(病院)内で勤務しており、その主な仕事内容としては、(1)移植患者との関わり(2)血縁ドナー(候補者)との関わり(3)データマネジメントです。造血(幹)細胞移植は「健康な造血幹細胞を提供するドナーの存在」という特殊性があります。そのため、移植源を準備する作業には、多くの職種との連絡調整や事務手続きが必要です。そこで、CTCという職種が発展してきました。血縁者間移植では、血縁ドナー(候補者)さんへの採取に伴う説明や健康診断の手続き、採取後のフォローアップ等を行います。非血縁者間移植では、骨髄バンクやさい帯血バンクへの登録作業、登録後の事務手続きや患者さんへの説明等を行います。また、院内外ともに、

これらに関わる多職種(多施設)との連絡調整の窓口となり、円滑な移植源の準備に努めます。CTCは、患者さんやそのご家族、血縁ドナー(候補者)さんやそのご家族と関わる職種のため、どちらかに偏った関わりはできません。患者さんも提供いただくドナーさんもお互いが納得したうえで治療を選択し、安心して受けることができるために、支援する役割を持っています。

少しでも多くの患者さんやそのご家族が、安心して移植医療を受けることができるために、多くのCTCが移植施設で活躍することが必要と考えます。しかし、現在CTCとして勤務しているのは全国の移植施設の内20名程度であり、そのCTCの背景は看護師や医療ソーシャルワーカー、事務職員とさまざまです。

そこで、日本造血細胞移植学会では、CTCを社会に広く認知される一職種として確立普及していくことを目的とし、平成23年度よりCTC委員会を設立しました。今後、保険点数化に向けてCTCの認定制度を発足させるためにも、まずは実際の業務にあたって必要な知識と情報の共有化をはかるために研修会を開催します。まだまだ、発展途上である職種ですが、造血(幹)細胞移植に関係するすべての方たちがそれぞれの役割を発揮し、患者さんとそのご家族にとって、円滑に移植医療を受けることができるようなシステムを構築

していきたいと考えています。

研修会の募集要項については、日本造血細胞移植学会ホームページ(<http://www.jshct.com/>)をご覧ください。

■善意のお気持ちに感謝します■

広島県	蒼大&健大様	200,000円
愛知県	室賀 博幸様	100,000円
兵庫県	大嶋 明子様	50,000円
愛知県	下野 喜美子様	50,000円
埼玉県	及川 暢敦様	24,000円
大阪府	福田 博行様	20,000円
静岡県	豊田 龍二様	10,000円
長崎県	松本 博・智子様	10,000円
埼玉県	大寺 信行様	6,000円
東京都	松本 翔次郎様	5,000円
	ナカムラヨウイチ様	100,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

00180-9-57390

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

支店番号：019(銀行のATMから当ネットワークへ寄付金を送金する場合は支店名は『ゼロイチキュー』と入力してください。)

預金種目：当座

口座番号：0057390

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク



すこやかに、幸せに。

明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。



ニプロ株式会社
大阪府北区本庄西3丁目9番3号



新連載

さい帯血バンク *our staffs!* うちのスタッフ

①日赤東京さい帯血バンク

草創期と神奈川統合

正式名称は東京都赤十字血液センター臍帯血バンク。さい帯血バンクは活動開始からまだ10年少々なので、多くのさい帯血バンクには「この人を中心にバンクを創った」というような人がいます。当バンクでそれは高梨美乃子先生（バンク管理責任者、ネットワーク事業運営委員、血液センターでは製剤部長）です。たおやかな風貌にもかわからず、決断は早くさらりと実行して、ここまで日赤東京さい帯血バンクを育ててきました。始めた動機を聞くと「当時、骨髄バンクが発足して活動していたけどドナー探しが大変そうなので、移植がもう少し楽に受けられるようになるのなら、さい帯血の保存を考えてもよいかあと思ったの」とのこと。1994年から研究部でさい帯血の保存についての検討を開始しました。「製剤としての輸血血液」を扱っている血液センターで、当時は得体の知れない血液（臨床使用を目指してはいましたが、研究用として保存してきたさい帯血）の臨床使用を認めてもらうのは、かなり大変なことだったと思うのですが、1999年に移植への提供が始まり、バンク発足となりました。

代表は歴代の血液センター所長です。現代表の中島一格所長は、穏やかで温和だけど太っ腹（体型はスリム）です。本業で忙しい中、さい帯血バンクについてもいろいろと考えていただいています。何ととっても最近の大英断は、神奈川臍帯血バンクとの事業統合です。日本さい帯血バンクネットワークの将来構想委員会で「いずれはさい帯血バンクの統合も必要」といわれてはいても、いざとなると大変難しいことです。神奈川バンクは、西平浩一先生、磯山恵一先生を中心に小児科の先生たちが「患者さんたちがさい帯血移植を受けられるようにしたい」という趣旨から設立したわが国最初のさい帯血バン

クです。移植も他に先駆けて行ってきた先駆者です。それを「所期の目的は達成した」と他に譲る決断は、なかなかできることはありません。実務を行っている私（小川）としては、さい帯血、機材などと共にその思いも引き継ぎたいと思います。また、自慢させてもらえば、それを受け取る決断をした「うちの親分たち」もなかなかのものだと思います。

総勢10人の仲間たち

さい帯血バンクの事務局と調製保存作業は、血液センター製剤三課員が行っています。私を含めて10人の仲間がいて、さい帯血の受入れ、調製、検査、アンケート発送などの登録の事務、移植申込から提供までの事務や検査、衛生管理、機器管理などの管理事務、手順書の改訂、基礎検討などを手分けして行っています。

一番のベテランは伊藤さん。友達をつくるのが上手で、センター内どこに行っても友達から声のかかる顔の広い（実際は細面）人です。「さい帯血バンクは小さな血液センターのよう。受入れから、調製、提供まで全部やれるから面白い」といって、八面六臂の大活躍。さい帯血の調製・検査はもちろん衛生管理や基礎検討、移植提供の事務までこなします。やっぱり励みになるのは、提供がスムーズにできて、移植が成功することです。

次に、子育て真っ最中の本田さんと福永さん。仕事時間が限られているので、調製・検査やさい帯血登録の事務など、大忙しでやっています。多分家に帰っても大忙しで、優しい（時々怖い？）お母さんだろうと想像しています。

加えて若者が二人、こちらはめきめきと発展

途上で、これからは楽しみです。神奈川バンクから菅沼さんが移って来てくれました。「お荷物と一緒に参りました」とおどけていますが、移植提供の事務をしっかりと担っています。本業が他にある屋部係長。さい帯血のメンバーがあまりにドタバタしているのを見かねて、さい帯血の引き取りやら、電話対応やらを手伝ってくれています。

この4月は異動が多く、2人が変わりました。移ってきた山田さんは「以前は自動機械を使った検査をしていました。さい帯血の仕事では手作業で行う検査が多く、その場で自分の腕前がわかるのは面白い。けれど一面、未完成な感じもする」とのこと。同じく橋本係長。移植手続きの仕事始めて、連日申込が続き、慣れない中で悪戦苦闘していたのですが、今では余裕で調製検査の訓練も開始中。「昔、さい帯血に造血幹細胞が入っていると聞いた時に、骨髄採取みたいに骨に針を刺さなくても、幹細胞が取れるのだからすごいと思った。あれから10年でこのように普通に移植に使われるようになったのは感慨深い。でもバンクごとに手順が違ったり、まだ整理する余地がたくさん残っているようですね。

そうなんです、さい帯血は手作り、手検査。まだまだ改善する余地がたくさんあります。これからも力を合わせて、よりよいバンクを目指します。

（小川篤子）



高梨先生(前列右から2番目)と製剤三課の仲間たち



移植 病院 訪問

⑮ 日本医科大学病院

下町風情あふれる 町の老舗病院

文京区にはその名のとおり、学校や、大きな病院をはじめ、寺社や老舗、文豪ゆかりの場所が多く点在し、下町の風情が感じられる町並みも数多く残っています。そんな文京区千駄木に日本医科大学付属病院（日医大）があります。早くから救命救急センターを設置し、がん診療拠点病院として指定を受けている全国でも有数の大学病院（特定機能病院）です。日本医大は創立130年記念事業として再開発の最中で、今年から病院施設も一部建て替え工事が始まっています。血液内科のある病棟も建て替えられる予定とのことですが、隣接する工事現場からの粉塵が入らないよう細心の注意をはらいつつ、一層の感染症対策に力を注いでいるとのことでした。

造血幹細胞移植は 1995年から

日本医大の血液内科・移植グループは1995年、田近賢二先生（現横浜南共済病院）が東京大学医科学研究所附属病院（東大医科研）での勤務の後、母校に戻って始まりました。数年は自家末梢血の移植が中心でしたが、1998年より血縁者間での同種移植を、また2001年からは骨髄バンクの認定施設となり、非血縁者間の同種移植を開始しました。今回お話を聞いた中山一隆先生は1998年、東大医科研で国内第一例目の成人のさい帯血移植症例を主治医の一人として経験され、1999年に日医大に戻りました。その後、田近先生や創成期を支えた数人の先生方を中心に、東大医科研での方法を踏襲しつつ、さい帯血移植を開始して、2000年にはさい帯血バンクの登録病院となりました。現在でも、さい帯血移植を治療の選択肢のひとつとして積極的に取り入れていて、とりわけ急性骨髄性白血病においては良好な成績をあげています。

現在、医師10名、無菌室7床という体制で診療にあたっており、最大で50名を超える血液疾患の患者さんを受け

入れ、これまでに約250例の自家移植を含む造血幹細胞移植を手がけています。今では年間約20例前後の移植のうち、さい帯血移植数は約3分の1程度に留まっています。あくまでも個々の患者さんの病態に合わせて治療を決めた結果だそうです。また、中学生から高齢の方まで、入院患者の年齢層が幅広く、他の病院や他科から移ってきた患者さんも多くいらっしゃるそうです。

研究者育成と臨床

大学病院は、臨床だけでなく研究も欠かせません。日本医大では急性骨髄性白血病の予後に影響を与える遺伝子の解析など、厚労省の研究班の一員としての研究活動等に積極的に参加する一方、若手研究者の育成にも力を入れているとのことでした。

日本医大の付属病院の一つに、千葉県印旛郡の千葉北総病院があります。この病院の血液内科にも千駄木の本院から医師が派遣されており、数年前から自家移植がスタートしています。また、それ以外の後方支援病院として、神奈川県横浜南共済病院や墨田区同愛記念病院などがあり、日本医大で治療経験を積んだ医師が派遣され、血液診療のみにとどまらず、地域医療の



担い手として活躍しています。

このように日医大から人材が広がってゆくことで「患者さん重視の医療」が確実に実を結んできていると言えるのではないのでしょうか。

それでも手弁当感覚で

施設の多さや実績をみても、とても規模が大きい大学病院のように思いますが「(病棟自体は)まさに手弁当でやっているような感じです」と中山先生は語ります。意外な発言のように思いましたが、それぞれの仕事をこなしつつ、患者さんにきめ細かい対応をする為に、医療スタッフ皆で知恵を出し合って工夫していかなくてはならないことも多く、その努力を続けて行くことが必要不可欠とのことでした。

病棟の廊下を歩いている患者さんに医師や看護師が気軽に声をかけていて、その様子はとてもアットホームな感じがしました。

さい帯血移植をした入院中の20代の女性患者さんにもお話を聞くことができました。まだ移植後25日目とのことでしたが、経過は順調だそうです。入院中のことは「体が思うように動かなかったり、大変だと思ったりしてもそのひとつひとつがもう味わえない貴重な体験だと思って過ごすようにしています」と、とても明るく答えておられました。患者さんからの言葉は医師や看護師さんへの感謝が感じられ、良好な信頼関係が築かれていると感じました。